

受付番号

11-002

## 留学・研究計画書

氏名 吉川 和希	留学機関名 ハノイ国家大学ベトナム学・開発科学院
留学先国名 ベトナム	留学期間 西暦 2012年4月～2013年3月
研究テーマ 15世紀後半～16世紀前半における中越間の「越境」	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>15世紀後半～16世紀前半のベトナムと中国は、それぞれ黎朝と明朝のもと、対外交通を管理しようとし、特に明朝は民間の対外交通に対する厳しい禁令を出した。その結果両国間の交通は建前上、両国間の公的使節の往来に限定される。しかし同時代の史料には、たびたび中越間の「越境」に関する記事が出現する。その舞台は中国の雲南や広西からベトナムにかけて広がる山岳地帯であり、その主体は現地の民間人である。このことから、王朝の管理の及ばないところで民間レベルの交流・交易がおこなわれていたことは明白である。しかしこの現象に関して、当該期中越関係に関する既存の研究はほとんど考察をおこなっていない。それは、従来の研究が国民国家史観の枠を出ておらず、結果として明朝・黎朝間の政治的な交渉に研究の蓄積が偏っていたからである。</p> <p>一方、海域史研究においては、海上を通じた民間貿易が活発化する15世紀後半～16世紀前半の東・東南アジア世界を理解する際に、国家のはざまを生活の場とし、異なる国家領域を媒介することで生きる「境界人」という概念が近年注目を集めている。しかし「中国史」「東南アジア史」「日本史」などの学界間の断絶により、中越関係を東・東南アジア史の広い文脈で理解しようという試みは、ほとんどなされてこなかったのである。申請者の問題視角は、「境界人」という視点を中越関係史研究にも導入することで、上述の問題点を克服し、当該期中越関係を同時代の東・東南アジア的文脈の中に位置付け直そうという点にある。</p> <p>この目的を達成するためには、まず中越間の「越境」の実態をつぶさに解明する必要がある。申請者はこれまでに、従来の中越関係史研究が依拠していた編纂史料だけでなく同時代明人の文集をも参照し、その中の「越境」に関わる事例を抽出・分析した。その作業を通じて、15世紀後半～16世紀前半には、中越間の境界をまたぐ民間レベルでの交流・交易が、中越境界の山岳地帯において通時的に発生していたことを明らかにした。しかし山岳地帯に関するベトナム側の史料については、日本国内の各研究機関にほとんど所蔵されておらず、民間レベルの交流・交易が発生した背景については深く考察することができなかつた。この問題を解決するためには、ベトナムの研究機関に所蔵される史料の収集と実地調査が欠かせない。</p> <p>中越境界の山岳地帯における民間レベルの交流や交易を考察対象とする申請者の研究は、東・東南アジア史を理解するためには、近年流行する海域史だけでなく「山の世界」での交流も視野に入れなければならないことを示すものであり、陸域史研究と海域史研究をつなぐという意味で大きな学術的意義を有する。</p> <p>また、グローバル化が進行する現代において、東・東南アジア諸国は経済的な結びつきを急速に強めている。東・東南アジアの歴史を巨視的な視野で考察する申請者の研究は、現代における当該地域のあり方を探る上でも大いに貢献するものであると考えている。</p>	

# 成果報告書

記入日 2013年4月23日

氏名 吉川和希	留学先国名 ベトナム	所属機関 ベトナム学・開発科学院
研究テーマ：15世紀後半～16世紀前半における中越間の「越境」		
留学期間：2012年4月～2013年3月		
<h2>1. 本研究の主旨</h2> <p>本研究は、黎朝前期ベトナム（1428～1527年）と明朝中国（1368～1644年）との関係、特に両国間における民間人の「越境」を扱う。近代的な国民国家による領域支配がおこなわれる以前において、王朝の管理の及ばないところで民間レベルの「越境」や私貿易が活発におこなわれていたことは言を俟たない。当該期の中越間の場合も同様であり、私的な交通は明朝・黎朝共に禁止していたが、編纂史料には中越間の民間人の「越境」や私貿易に関する記事が断続的にあらわれる。</p> <p>しかし従来の研究は、これに関してまったく考察をおこなっていない。その原因は、①従来の黎朝前期研究が一国史の域を出ておらず、ベトナム国内の政治史・社会史や黎朝・明朝間の政治的な交渉に研究が偏っていたこと②主に編纂史料を使用してきた先行研究の限界などが挙げられる。</p> <p>本研究はかかる状況を克服するため、①15～16世紀の東・東南アジアにおける境界を超えたヒトやモノの移動を扱う海域アジア史や中国辺境社会の流動性を描きだした近世中国史の成果を範とし、②中国・ベトナム双方の公文書やベトナムの現地史料などを新たに用いて中越関係の実態解明を目指すものである。</p> <p>今回、松下国際財団のご助力を賜り、ベトナムにおける新史料群の調査をおこなうことができた。以下に、調査・研究の概要とそれにより得られた成果を報告する。ただし今回の史料調査は、報告者の狭い専門研究だけでなくベトナム前近代史研究全体の進展、新史料収集を目的とした。その背景には、本分野の研究者不足という事情がある。日本人のベトナム前近代史研究者は10人にも満たない。そのため、自身のみの狭い専門研究に閉じ籠ってでは、学界全体の苦境を打開できないと考えたからである。</p> <h2>2. 文献調査</h2> <p>本留学中、報告者が文献調査をおこなった機関は、ベトナム最大の漢文史料所蔵機関であるハノイの漢喃研究院である。本研究院は仏領期のフランス極東学院から継承した史料群に加え、独立後に収集された多量の史料をも収蔵する。本調査において、日本では手に入らない各種の文字史料を多く収集することができたのは、大きな収穫であった。以下、報告者が調査した史料につき、典籍史料、金石史料の拓本、家譜の三種類に分けて報告する。</p> <h3>(1) 典籍史料</h3> <p>本調査中には、地理書や北使録（中国に派遣された使節の記録）なども収集したが、最大の成果は『黄閣遺文』という黎朝期の公文書を集めた書籍を新たに収集できたことであった。上奏文や詔勅などの公文書には対象案件に関する詳細な情報が記されているため、編纂史料のみを使用した従来の先行研究を乗り越えるためには欠かせない。この『黄閣遺文』という史料は、漢喃研究院に三点の版本が存在する。各版本によって収録される公文書に大きな違いがあるため、今後は書誌学的な考察を加えていく必要があるが、今回はそのうちの一点の中に、1478年8月に黎朝が中国広西の地方官に対して宛てた公文書（咨文）の写しが収録されているのを発見した。本文書は、1475年正月に明朝皇帝からの勅を受けた黎朝側が、それに応じて朝貢使節を派遣する際に、使節の派遣について広西の地方官に報告したものである。</p>		

黎朝に明朝の勅を齎した使節に関しては、報告者は留学前の段階で、ある明代文官の文集の中に本使節の行程や黎朝内での活動などの詳細を記した上奏文が収録されているのを既に発見していた。したがって、本史料を収集できたことにより、本使節の往来に関して中国側史料とベトナム側史料の双方を得たことになる。これらの史料によって、中越間の使節往来の機に、広西・雲南・黎朝が三者三様のやり方で利益を得ようとしていたことが明らかとなった。公文書の残存が断片的な本分野において、これは貴重な成果であった。

## (2) 金石史料

漢喃研究院には六万枚を超える金石史料の拓本が所蔵されているが、その大半は黎朝後期（1533～1789）以降の立碑であり、黎朝前期のものはごく一部である。また、漢喃研究院では、そのすべてを登録番号順に影印して刊行する出版事業が進行中で、現在 22 巻（拓本 22,000 枚）まで刊行されている。しかしその拓本集には解題も目録もないため利用勝手が悪い。そのため、一枚一枚の拓本に直接目を通し、内容を確認する必要がある。

今回の留学は金石史料の収集を主な目的としていなかったため、一年間で目を通せたのは約八千点にとどまるが、それでも黎朝前期関連の碑文 20 点あまりを得ることができ、黎朝前期研究における金石史料のさらなる可能性を実感できた。そのうち約 10 点は、黎朝前期の科挙官僚の後神碑（死後に祠堂に祀られることになった人物の経歴や功績などを後世に刻んだ碑）であり、編纂史料からうかがい知ることのできない科挙官僚の動向に関する情報が得られるため、有益である。

また、磨滅がひどい碑文などは、拓本集に掲載される写真の中だけでは判読しづらい箇所もあり、漢喃研究院にて拓本を実見できたのは、大きな成果であった。

## (3) 家譜

家譜とは一族の来歴を記した家の歴史書である。黎朝前期の開国功臣や科挙官僚を始祖・先祖とする一族の家譜によって、その人物の経歴や功績を知ることができるほか、中には一族に関する公文書を収録したものもあり、貴重な情報源である。一年間の調査を通じて、黎朝前期の開国功臣や科挙官僚関連の家譜を 10 点あまり収集することができた。

## 3. 現地調査

本留学中、史料収集のため、二度にわたり現地調査をおこなった。以下にその成果について報告する。なお、二度とも受け入れ先のベトナム学・開発科学院に調査の手配をお願いした。

### (1) タインホア調査

ベトナム北中部に位置するタインホア省は、黎朝の創始者である黎利が中国に対する独立戦争を開始した地であり、黎朝皇室の陵墓群が残存するほか開国功臣関連の史跡も多い。報告者は 2013 年の 1 月末にタインホア省で調査をおこなったが、これは 2012 年 12 月末に報告者が参加した八尾隆生氏のタインホア調査の追加調査である。2012 年 12 月の調査では、15 世紀末に作成された墓誌二点を発見することができ、碑文の写真撮影をおこなったが、碑文の磨滅が激しく写真だけでは判読しづらい箇所があるため、全文を筆写すべく今回の追加調査をおこなった。碑文二基のうち一基は 15 世紀後半の武官の墓誌、もう一基は黎朝前期の公主の墓誌である。上述の如く黎朝前期に立てられた碑文は数が少ないため、なおさらこれらの墓誌の史料価値は高いといえる。

ただ正直なところ、碑文の磨滅が激しいため、実見をもってしても全文を判読するのは不可能であった。それでも、写真だけでは判読しづらい箇所を何箇所か判読することができたのは大きな収穫であった。

### (2) ランソン調査

帰国直前の 2013 年 3 月中旬に、ベトナム東北部のランソン省で現地調査をおこなう機会を得た。ランソン省は中国広西省と境界を接する本省には、キン族（ベト族）はもちろん、タイ族・ヌン族などの少数民族や中国人も多く居住している。

今回の調査では、ランソン省に現存する最古の碑文二基を実見することができた。一基は水門亭 (Thủy Môn Đình) 碑文 (1670 年立碑)。碑文はカオロク県ドンダン市の三叉路近くに安置されている。ランソンの地方志には内容が紹介されているが、報告者が実見した際には残念ながら碑文の大部分が磨滅しており判読不能であった。もう一基は 17 世紀後半の漢郡公なる人物の功績を讃えた碑文 (1683 年立碑) であり、現在は、ランソン市内にある漢郡公を祀った左府祠堂 (Đền Tả Phủ) の中に保管されている。この漢郡公は、現在のランソン市に位置するキールア市場を開設した人物とされている。この碑文には、漢郡公の祠堂建設にランソンの官員や少数民族の首長のほか中国商人もかかわったことが記されており、ランソンが 17 世紀後半の時点で、中国商人も集まる商業拠点となっていたことが伺える。

本調査ではそのほかに、ランソン省総合博物館にて黎朝関係の史跡や遺物などについて、博物館の専門員の方々に情報を提供いただき、中でも 1515 年の年次を持つ印鑑を実見できたのは貴重な成果であった。専門員の方によれば、本印鑑は黎朝政府が少数民族の首長に与えたものであり、現在のヴァンクアン県 (huyện Văn Quan) の民家にて発見されたとのことである。ただその際は帰国間近であったために十分な調査がおこなえなかった。今後機会があれば、印鑑を所蔵していた家で聞き取り調査をおこないたいと考えている。

また、本調査においては、ランソン省の地方志の編纂にも携わった省図書館の職員の方に協力をお願いし、博物館での調査の手配をしていただいたほか、水門亭など多くの史跡についてご教示をいただいた。また、調査最終日には、ランソン省内の各史跡についてまとめた資料もご提供いただいた。現地調査をおこなうためには、このような方々との関係構築が不可欠であることを実感した。

以上をもって、本留学の成果報告を終える。ただ、自戒のために敢えて言うと、以上に述べた成果は甚だ不十分なものである。それはひとえに、収集史料を十分に分析しきれていない報告者の未熟さによる。今後、今回の収集史料を最大限に活用すべく、さらなる研鑽を積んでいきたい。

#### 4. 今後の課題と展望

今回の一年間の留学を通じ、今後の自身の研究活動に関していくつかの課題が見えてくると同時に、新たな展望をも得ることができた。以下に、今後の展望と課題を記すことで、成果報告の締めくくりとしたい。

第一に、本研究のみならずベトナム前近代史研究における金石史料の可能性を再確認できた。金石史料については、上述の如く漢喃研究院から拓本集が刊行されているものの、解題や目録がない。そのため、拓本集の既刊の 22 巻すべてに目を通したうえで、自身で目録化をおこなう必要がある。この作業を通じて、ベトナム前近代史研究の効率が上がるだろう。また、解題を附した目録を公開することで、日本人研究者の「ベトナム史参入」も容易になろう。

第二に、現地調査の必要性を実感した。特にランソンに調査に赴く前、地方志などで文字史料の存在や史跡の位置を一通りしたのであるが、実際に現地に赴くと、書物からでは得られない情報が多く得られた。上述の 1515 年の印鑑もそのひとつである。また言うまでもなく、現地調査で成果を上げるには足繁く現地に通う必要がある。今後も機会があれば、タインホア・ランソンをはじめ、なるべく多くの省で調査をおこなえるよう、努力していきたい。

第三に、翻訳・通訳の重要性を痛感した。これは自身の専門研究と直接関係しないものの、日本の学術界とベトナムの学術界を接続するためには不可欠である。特に、現在タンロン皇城遺跡に関する日越共同プロジェクトが進行中であり、歴史学や考古学の「専門用語がわかる通訳・翻訳」が必要とされている。しかし日越双方において、この種の通訳が務まる人材はごくわずかしかない。特に、管見の限り、日本人は皆無である。実際、報告者の留学中も本プロジェクト関連のワークショップが何度か開催されたが、わずか二名のベトナム人研究者の方がそのすべてにおいて通訳にあたっておられた。しかも、そのうち一名の方は、(もちろん日本語は非常に堪能だが) 必ずしも歴史学・考古学の専門家ではない(それゆえ、通訳の準備作業、下調べが非常に大変であったと推察される)。今後、日本の側で「専門用語がわかる通訳・翻訳」の育成が喫緊の課題であり、報告者自身も、自身のベトナム語スキルを向上させることでこの事態の改善に向けて努力していきたい。

## 5. 留学全般の感想

今回の留学では、本当に多くの方にお世話になった。生活面では、ホームステイ先のご家族には、特に病気を患った際などに、大いに助けていただいた。語学面では、ベトナム語の講師の方々はもちろん、普通の学生の友人などにも（報酬がないにもかかわらず！）熱心にベトナム語を教えていただいた。研究面では、ハノイ人文社会科学大学歴史学科の先生方には授業の聴講を快諾していただいたし、漢喃研究院やその他の図書館・文書館の方々にも、手続き面で不明な点があった際には快く相談に応じていただいた。そしてなによりも、受入先のベトナム学・開発科学院の事務員の方には、留学手続や調査の手配などで大変お世話になり、調査先の現地の方々には、快く調査に協力していただいた。外国人の大学院生が単身で調査先に乗る（いかに協力者が同行しているとはいえ）現地の方々から冷淡な待遇を受ける可能性もあるだろう。それゆえ、快く調査にご協力いただけるのは、非常に有難いことだと感じた。

報告者が、今回の留学で、ささやかながらも成果を得られたのは、ひとえに、以上に述べたすべての皆様のご助力、ご協力があったからにほかならない。こうした皆様に対し「恩返し」していくのが、報告者にとって最も重要な「宿題」のひとつといえよう。そして、こうした皆様と知り合い、次回以降の調査につながる「足掛かり」を築けたことが、今回の留学の最大の「成果」であったように思う。

最後になりましたが、このような貴重な一年間の留学機会を与えくださった松下幸之助記念財団及び審査員の先生方に心より御礼申し上げます。